

■ 春季修學旅行記

菊池泰旭

五月二十五日 晴天

雲霧尙深く閉ざし、東雲漸く白む頃、吾旅行隊一行、三十九名は、田附深澤兩教授引率の下に、旅行の途に付く。四時、山門前に、集合。梵音朗々道中安全を祈り、懐かしき身延を後に大野に向ふ。

五時半二隻の船に分乗し、朔は横たへれど、詩を賦して、曹孟徳を氣取あり、舷を叩いて歌ふあり、船は岩淵に着きぬ。

十時三十二分岩淵驛を發し、藤澤に着きこは二時三十分なり。

北八丁余にして、遊行寺に至る。時宗總本山にして、小栗判官、照手姫、を祭つる。藤澤より、電車にて、片瀬に行く、龜口寺に詣ざれば、最初目に映ぜしは、高壯の建築よりも、「刑場舊地」の立札なりき。

暫徳ぶ、文永八年九月十二日の更夜嵐！諸堂參拜を終へ、江之島に歩ず、例の岬き

も、馬耳東風と聞き流し、辨財天に詣で、右願左望鳥帽子岩稚兒ヶ淵龍登の松を勝つ、龍嶮に入る。洞は金剛胎藏の、二道に分れ奥に大日尊を安置す。

夕陽西に傾く頃極樂寺に至る、運慶作阿云の面、三國傳來の釋尊、其他二三の寶物を拜し、七時鎌倉に着く。

后三年の役の勇將、鎌倉權五郎景正の、御魂を祭り。四條金吾の舊屋敷。長谷の觀音に詣でて。八時頃宿屋光則の屋敷、土の牢に着きぬ、時や弓月、松の梢に懸り冷めたき風一陣、薄暗き中に、朗上人が徳を慕ひつ、牢前に跪まつける時は、一同御題目の聲も、涙を帯びて振へり。此處光則寺を、後に、大佛を経て、本覺寺に着きこは八時半なりき。當寺は東身延と、稱し、朝師、宗祖が眞骨を分け、奉安す。朝師を二世とせし、朝師が恩師、日出の開基なり。此地は、宗祖佐渡御赦免の砌、御滞在の惠比壽堂の舊地なり。

着床十一時。

五月二十六日 晴天

四時半起床。朝師堂に勤經を終へ、朝食に付く、終はれば當寺檀頭、關保兵衛、關芳太郎、兩氏挨拶に兼て、鎌倉名産、瓦センペイ一箱つゝを、贈らる。境内に、刀劍

名匠正宗、及び剛力石渡新造左衛門の墓あり。山主、及兩檀頭の厚意に依れる地事に明るき、案内者の、導くが儘に従へば、鶴ヶ岡八幡、丹碧標として、棟宇宏壯、石段を登れば第十七段、是源氏三代滅亡の處、銀杏は其の昔を語り顔なり。寶物館に至れば其多なる、筆録の、及ぶ處にあらず、國寶のみを、茲に擧ぐ、後白河法皇より賴朝公へ贈られし刀三寸余寸。天鹿兒弓天直毛矢、源義朝公奥州討伐の節奉納。菩薩の面賴朝公奉納。五龍の御衣、龜山帝弘安役の節奉納。拜覽終つて武衛殿。神奈川師範學校。賴朝公墓所。島津豐後守の墓。等、又感無きにあらず。鎌倉の宮に詣ず、護良親王を祀れり、山腹に土牢あり、建武二年淵邊義博の爲、哀れる、最後を終へ玉ひし所なり、廣き二間四方余。歩に従て、北條九代屋敷。鍋冠親師行法の地たる妙隆寺。

辻説法の舊地。安國論詠草の安國論寺。愕
嚴親王の開基なる、妙法寺等に詣す。中食
は、松葉ヶ谷、長勝寺に到れば山主吾行を
欽び、自ら寶物の説明、松葉谷最初靈地に
關する、正細なる力説は、安國論寺妙法寺
等、安國論、御記草嶺の、多なるに、疑ひ
居りし、折柄とも、痛く感ぜられたり、當
寺は京都本國寺の舊地なり、午後一時、當
寺を、辭して、牡丹餅の靈地常榮寺。日照
上人掛鏡の靈地實相寺。伊東左遷、出船の
地、妙長寺に六百年の昔を偲び、行くこと
數丁、香風園に、涼を入れ、建長、園覺、
兩山には、今昔の感なくんばあらず。徒歩
大船に至る、四時十三分發横濱に向ふ。五
時横濱驛に着し、電車にて常清寺に入りし
は、五時半なりき。夜は一堂、特別の厚意
に依て、活動のロハ見物、了へて一時間自
由行動。十二時着床。

五月二十七日

起床四時半。六時常清寺を、辭して、常
清寺御賢弟の、案内に依て、市街。公私建
築物、西洋町。海岸通。築港。公園を、見

物。十時五十何分の列車にて、横濱を發し
東京に向ふ。東京驛に着せば、懐かしき古
友東京の諸兄は、七八名も吾等を迎られて
感謝の辭、思ひ／＼の挨拶に、早宮城前に
着きぬ。靜かに今此三界の讀經は、王佛冥
合の叫び。日比谷公園銀座通りを見物、午
後一時半、一傳馬町別院に着く、折も折其
日は婦人會員身延參拜慰安會の催し、重子
様より、菓子のお養を、受け、併て、其末
席に座して、松本綿子女史の、築前琵琶、
小松原の曲を聞くを得た。三時より自由行
動。各自、思ひ／＼の樂しみやありけん。

十一時着床。

五月廿八日

午前四時半起床。七時準備を終へて、伊
藤兄の案内によりて、芝増上寺に、秀忠公
御廊を拜し、芝公園大隈伯の銅像前に、少
時の休息。泉岳寺。宗務院。を経て、九時
四十五分、品川驛に至る。それより、池上
池上本門寺に詣す、本堂、開扉、寶物拜觀
を了へ、宗祖茶比場、宗仲夫妻の、御廊を

拜し、大崎に向ふ、寶物の重なる物、兄弟
鈔妙法尼御前御鈔、建治の御本尊、皆宗祖
が御眞筆なり。其他臨滅度時の半鐘。金の
香爐。等寶物多し。庭は、關東第一の稱あ
り、勝安房と南州との江戸城開放談判の、
舊地。尙、境内に、星亨之墓あり。二時、
大崎に着す、今日しも上棟式日にして、五
百の賢子は、嬉々として準備に忙殺たり、
是非この事に、其式の末席に列し、撮影さ
へもなして、堀之内妙法寺に着きしは、六
時なり、茶菓の饗應あり、尙檀林生一同よ
り、菓子を贈くる。七時十八分妙法寺を辭
して、上野博覽會に向ふ、不忍池上に映つ
る會場の夜景を眺めながら會場に入る、さ
ながら、東海道五十三次を旅行するの感あ
り。九時閉會なれば、靜かに見物し得ざり
しを遺憾とす。愈々今夜は東京を辭す、路
傍の建築等、別離の感あり。飯田町驛に至
る、大崎山梨學友會諸師、及び在京古友に
送られつゝ、長蛇疾驅、忽ち夢幻の境に彷彿
ふ。

五月二十九日 晴天

甲府々々!の、金切聲に、驚き見れば時正さに五時、汽車を下り、信立寺に朝餐を終へ九時半遠光寺に行く、晝辨當を頂き三台の馬車は線路の軌り音高く十二時半、青柳に着く、諸堂参拜賣物拜觀、二時歟淨に至る、三時、歟淨を出船、失敗談感想談に時の移るを知らず、五時半波木井に着船、夕昏、祖堂前に教頭閣下及居餘り生の出迎を受け、宗祖に無事歸山を告げ、一同欽然裡に解散せり。時正さに八時なりき。已上。



同窓會記事

月日に關守無しとか、今年の春も早く暮れてしまつたが、月日の進むに従つて我が同窓會は益々發展する。昨年の大會に於いて、總ての點を改良し又補足したる同窓會は此の一年間に長足の發展を來し、此處に例年より少し後れて五月二日定期大會は開かれた。然して吉田教師を議長に田附教師を副議長に推し(議事半にして要用ありて

歸寺されしを以つて藤田教師之に代る)午前十時間會より午后四時迄會員一同倦意の色も無く會則の修正其の他諸般決議討論ありて議事全く了るや更に幹事の改選を行ひ大正六年度定期大會は此處に全く終了を告げたり。

新任幹事左の如し(部長は各従前通り)

高等部二名

藤岡一行 會計

松木本興 講演部

中等部二名

小坂田龍教 運動部

猪口海靜 文學部

尙昨年度に定めたる、幹事(舊)に對する謝意の件も今年より實施する事となり、去る六月十三日表彰式を行ひき。

講演部より

青葉の茂る初夏の候さ成つた、木々の若葉のズン／＼伸びて行くのが眼に見へる様な氣がする

我が講演部も、亦其の如く、益々發展し

つゝある。毎周二回の耕辯會に、各當直辯士が、我旁らこゝ練磨して居る有様は如何にも氣持が好い、そして天氣の好い日には滴るばかりの綠林中に、誰や知らぬ、自然を對手の樂說辯の聲さへ聞こへる。斯くの如くにして我が講演部は愈々發展して行くのだ。

今迄のは、内容の發展である、左に外部の方面を略記する。

回説教 四月十六日、妙石坊妙法二神祭に前講溝田に續いて森田教頭の説教あり、終つて泉、松木、藤田等の通夜説教に數十名の參詣者熱心聽法せり

回灌佛會幻燈 例年の如く、五月七日午后

六時より、釋尊並びに宗祖御一代幻燈會を開きしに、萬堂の參拜、立錫の餘地無かりき。因みに辯士は、松木、安積、荒木、長田(釋尊傳)早川、溝田、藤田、川口、辻、猪口、の諸兄にして、技士主任、太田、望月(海)なりき

回説教 五月十一日は陰曆三月廿一日にて願滿堂の祭典なりしを以つて、早川、藤